

日本レントゲン学会分裂・統合の経緯

1. 第11回日本レントゲン学会総会の紛糾

1933年4月、第11回日本レントゲン学会の評議員会で、司会の斎藤大雅(現会長)が次期会長に東京帝国大学の真鍋嘉一郎を推薦したところ、評議員のひとり、中島良貞(九大放射線科教授)から反対意見があり、これについて下記のような議論があった

第11回日本レントゲン学会 評議員会議事録 [1] より

期日: 昭和8年4月1日
会場: 京都ホテル4回ホール

3. 次回開催地予選の件

議長 斎藤大雅君: 昭和9年は日本医学会総会の開催される歳に当たって居りますので同会より書翰が来て居ります。日本レントゲン学会も其の一分科として参加する事に御異論はない事と存じます。就きましては次回会長予選の件がありますが、開催地が東京になる事になりますと種々な便宜上開催地の方をお願いするのが或は先例の様でもあります(「賛成賛成」という者あり拍手起る)。そういうわけがありますから我々幹事共幹事会のたび或は第3回幹事会にて種々ご相談申し上げ、其の結果皆様の熟誠なる御後援を戴いて、第6回日本レントゲン学会会長真鍋嘉一郎さんをもう一度ご足労を煩したいと多数を以て決議したわけであり。色々御考えもありのようでもありますが、其の辺は本学会及び日本のレントゲン学という事を考えて下されまして、真鍋先生を満場一致を以て御推薦したい事にお諮りする次第であります(拍手起る)。それでは満場一致(「会長不賛成です」というものあり)、起立に願います。多数であります。是れ迄光輝ある日本レントゲン学会は満場一致を以て来たにも拘わらず、ここに此の光輝を破られた事は私の非才によるので、皆様に陳謝致します(「陳謝に及ばず」という者あり)。

中島良貞君: 日本レントゲン学会の規則を読みますと、日本レントゲン学会の決議は総会の決議によるという事がありますが、あれはどうですか?

議長 斎藤大雅君: 無論本会の決議は総会の決議によって決するのであります。只今は評議員会に於て会長の予選が決定したので、勿論明日の総会の決議によって決するのであります。

(中略)

真鍋嘉一郎君: それから一寸ご挨拶申し上げます。只今の評議員会に於きまして多数のご賛成を得まして私に会長を再びせよという御極めでありますが、その応諾の御答えは保留しておきます。今晚は予選でありますし、私の会長となるについて反対せらるるお方のご諒解をも求めて置かねばならぬからして、明日の総会に於きまして御決定の後の事とし、今日は多数の方からして御好意を蒙った事に対してご挨拶を申し上げます。

中島良貞君: 私は先刻真鍋教授の次回会長予選について

反対申し上げます。先生の人格学識に於て私は深く崇拜もし、私淑もして居ります。満足して居ります。真鍋先生其の人を排撃するのではないのです。例えば外科学会の会長として内科の帝大教授が椅子に坐って外科の教授は何の面目がたつのです。僕はそれを同情して貰うというのです。日本のレントゲン学を發達させようと言うならばこの私の表情を察して貰いたいと云うのです。どうか真鍋先生も私の心を酌んで先生を排撃するのではないと云う事を御諒解願います(「それは良く判っています」というものあり)。

中泉正徳君: 一寸申し上げますが、東京帝国大学医学部には物療内科と放射線科と二つの教室があつて、物療内科では物療に関する仕事を、放射線科では放射線に関する仕事をやって居ります。それで私の意見としては、真鍋先生にお願いして日本レントゲン学会則第2条「本会に於てはレントゲン学及び理学的療法に関する学術的研究を進め、且つ其の知識を普及する事を目的とす」という条項に悖りはしないと申しております(拍手)。

中島良貞君: 今の御説は一応尤もです。然し世の中の素人というものは内容は存じません。そして真鍋先生が第6回に既に会長をやり、再び又同じ處で物療内科に居られる真鍋先生が立たれると素人は異様な解釈をするでしょう(拍手するものあり)。

村松篤治君: 私は別に次回の会長をどなたに賛成不賛成というのではありませんが、大体レントゲンと云うものは



斎藤大雅(京大レントゲン科).
第11回日本レントゲン学会会長.



真鍋嘉一郎(東大物療内科).
第12回日本レントゲン学会会長.



中島良貞(九放射線科). 真鍋の会長就任に異を唱えた.



長橋正道(阪大放射線科). 中島とともに反対派の先頭に立った.

単独では一科として独立しないものである、聴診器も持ち又打いても見るので単独では診断の価値はないものだろうと思います。現在の日本レントゲン学会会員も必ずしもレントゲン学専門の方ばかりではなく、寧ろ他科の方が多いのであります。婦人科又は内科等でレントゲン学に造詣が深い方に講演をお願いして居ります。我国のレントゲン学の発達は最近の事で、大部分は他科の方が手始めにやり今日に至ったものだと思います。現在の我国の状態に於ては必ずしもレントゲン専門家の中から適当の方があるとは考えられない様に思います。独りレントゲン学のみでなく学問の円満な発達は各科の連絡によるものだと思います。そう云う意味から必ずしもレントゲン専門を標榜して居る方だけが会長の適任者とは限らないと思います。(拍手起る)

中島良貞君：内科外科産婦人科を申しても、明瞭な境はなく聴診器はどこでも使いながらぼんやりした境界をつけて居る。然し「サイエンス」には境界なしだから、それを標榜して居られればそれが専門だろうと思います。

議長 斎藤大雅君：どなたか他に御意見がなくば、討論終結と致します(拍手起る)。先程大多数にて次回会長も決定し、明日の総会で決定したらばお引き受けくださるといふ太鼓判を押した事を証明されました。どうか明日は心境一点日本晴れになりたいと思います。

さらに翌日の総会で、次期会長推薦を巡って、以下のようなやりとりがあった。

第 11 回日本レントゲン学会総会記事 [2] より

期日：昭和 8 年 4 月 2 日

会場：京都帝国大学医学部病理学教室講堂

8. 次回会長選挙

昨夜の本会評議員会では、絶対多数で真鍋嘉一郎氏が御当選相成りましたから左様御願ひ申上げ度いと存じますが、如何で御座います。(拍手)

それでは満場一致でそう致します。(議長と呼ぶ御方あり。見れば評議員岩佐健次君)

満場一致ではありません。

議長：取り消します。絶対多数で確定しました。只今から宿題報告をはじめます。

尚会員牧野利三郎君外御一名、許可無くして発言されしも其儘宿題報告に移る。

議事録には具体的な記載がないが、この後中島良貞(九大放射線科)、長橋正道(阪大放射線科)、岩佐健次(同)を含む一部の会員が「会長横暴」を叫んで退席、会場付近にピラを貼ってデモを行ない、またその後京都市内の料理店で集会を行ない、翌日の複数の一般紙に声明を出した。

第 11 回日本レントゲン学会における反対派の声明書 [4]

凡そ学術は其の進歩と共に益々専門分科に分割するのは、学術研究の当然の事にして、如何なる科目と雖も、皆この道程を踏まざるものなし。今や我国に於ける斯学は、過渡期の揺籃時代を経て、確乎たる専門分科として、各大学に独立講座の新設を見るの状況にして、独立分科として、斯学に効験せるは、何人と雖もこれを疑わざる処なり。

由来我がレントゲン学会に於ては、多年の積弊ありて、斯学の発達を阻害せり。これを改むるには、斯学の専門家を以て会長とする事のみにより達するものと、今日までこれに向って努力せり。斯くて第 10 回及び第 11 回に至り、漸く専門家を以て会長となし、積弊を改むるの機運に向かわんとせり。

しかるに本日第 11 回日本レントゲン学会総会に於ける時期会長選挙に当り、会長は時代の趨勢に逆行して、内科を標榜せる真鍋嘉一郎君を推薦せり。ここに於て吾人は非専門家の専門学会々帖たる非を指摘し、専門家を以て会長たらしめんことを主張せんとしたるにも不拘、会長は多数会員の痛切なる反対を抑圧し、強いて之を決定せんとせり。何故に吾人多数の意見を無視するが如き高位を摂りたるや、全く不可解とする所なり。如斯くんば、レントゲン学の正しき進歩と独立を期し得ざるのみならず、再びかの積弊に陥るものにあらずや。

ここに於て吾人は、レントゲン学会の真の進歩発達の為め、多年の情義を棄てて、日本レントゲン学会を脱し、改めて広く同好向学の士を募り、同志と相計り、新に学会を組織して、斯学の正しき発達に真摯たる努力を捧げんとす。

右声明す。昭和 8 年 4 月 2 日有志

その後、レントゲン学会評議員会で協議の上、当日直接行動に出た評議員、会員 24 名が除名処分となった。[3]

2. 日本放射線医学会の設立 - 学会の分裂

同年 6 月、反対派は下記のような趣意のもと「日本放射線医学会」を新設し、日本レントゲン学会との分裂状態となった。

日本放射線医学会趣意書 [4]

レントゲン線発見せられて既に参拾有余年、之が医学的応用の進歩は真に日進月歩と謂う可く駿々として止る所を知らず。旺なりと謂う可し。之れを本邦に於ける其の発達史に観るに、当初臨床各科の応用領域に培われたる斯学は夙に其の揺籃時代の殻を脱して独自の領域に揺ぎなき根を下し、確固たる新独立科目として其の存在を示すに至れるは衆目の皆認める所たり。然れども之れを現実には既に 3, 4 の大学に於ては漸く斯学講座の独立を見たりと雖も、猶爾余の諸大学に於ては依然として未だ之れが実現

を見るに至らざるの状勢にあり。我ら同好斯学に殉ずるの士大いに発奮せずして可ならんや。然も猶敢て悟らざる者あり。年来の陋習、情実に墮し、徒に寄生的存在に甘じて、其の発達を俟たんとす。斯学本来の大成を害う之れより大なるはなし。

我等の或る者は曩に日本レントゲン学会に協力して夙に此の事を説くや年ありと雖も、遂に其の容れざるを悟り、深く決する処あり、茲に同志と相計り新に日本放射線医学会を創設して普く同好の士を天下に募り、共に斯学の純真なる発達の為に渾身の努力を捧げんとす。素より放射線医学は医学の各科に縦横に連絡を有する科目にして、唯其の専門家のみの独占す可きに非ざるや論なく、汎く一般医家の深き理解と協力とを待つ事切なるものあり。希くは同好の士奮って御賛同御入会あらん事を。

この後8年間にわたって、日本レントゲン学会と日本放射線医学会が併存し、それぞれが年1回の総会を開き、独立した学会誌を発行する状態が続いた。この間の事情を、後藤五郎は以下のように述べている。「同学の士の中には学会の分立を甚だ遺憾とし、合同を希望するものも多く、メンツ上振り上げた拳骨のやり場に困っている状態もないではなかった。旗幟鮮明なものは相手学会に顔が出せず、中立の者は双方に引張り尻になって会費は2倍、旅費は嵩んで甚だ不都合であった。事実親爺同志が喧嘩して、子供同志は案外楽しく集まっていた」[5]

3. 日本医学放射線学会の設立 - 学会の統合

1938年、第5回日本放射線医学会(会長 後藤五郎、京都府立医大レントゲン科)と第16回レントゲン学会(会長 岩井孝義、京大放射線科)が合同開催されて歩み寄りがはかられ、1940年4月の第7回日本放射線医学会で合同が決定、ここに「日本医学放射線学会」が誕生した。

第1回日本医学放射線学会総会開会の辞 (真鍋嘉一郎会長) [4]

本会は茲に紀元2601年即ち新世紀の初年においてその第1回総会ならびに学術演説会を開くにいたりたる事は会員諸君と共に慶賀に耐えざるところなり。而かもその開会地たるや皇国御大典挙行の地京都市においてしその会場たるやその創立の歴史古く由緒ある京都府立医科大学の講堂においてす。是以て本会の光榮とし深く吾人の責任を感じると共に将来の発展を卜する所以なり。さきに吾人は光輝ある紀元2600年において新学会を組織し世のいわゆる新体制に先んじて合同統一の実を挙げその本部を文部省に設置したる如き吾人の最も誇とするところなり。而来役員ならびに会員諸君の協力によりて第1回総会開会の運びとなり今日の盛時を見る抑も本学会の与るところの科目は医学部門中尖端的躍進を要し日進月歩の領域に属するものなり。会員諸君は何れも新進気鋭の篤学者にしてこの会期3

日間において平生の蘊蓄とその真摯なる研究成績を発表し相互知識の交換と共に将来の研究に須要なる示唆を得んとす。今や国家の動向は一億一心連絡提携国防は固より一國文化の向上発展に全力を注がんとするの時本学会の如きさらにその歩武を新たにして発足し遠近同学一堂に聚り和衷協同斯学の発展に献身努力せんとするものなり。会員諸君願くばこの会期3日間を最も有意義にかつ最も効果的に利用せられ学会の使命達成に努められんことを希望す。

1941年4月第1回総会が開かれ、会長は分裂騒動の時に指名された真鍋嘉一郎が選出された。ちなみに、真鍋嘉一郎は内科医であるが、最初期から放射線医学、理学治療の専門家として物療内科を標榜しながら、放射線医学の発展に大きく貢献した。名医の呼び声高く、夏目漱石の信頼厚い主治医でその最後を看取ったことでも知られる。第1回会長に内科医の真鍋をあてたことは、分裂の火種となった非放射線科医と放射線科医の対立を決着するための妥協案であろう。1941年の第2回会長は慶應義塾大学理学的診療科の藤浪剛一で(4月総会時病臥のため原邦郎講師代行、同11月病没)、以後日本医学放射線学会の会長はすべて放射線科医となり現在に至っている。

【出典】

1. 日本レントゲン學會雑誌 11:28-35,1933
2. 日本レントゲン學會雑誌 11:35-41,1933
3. 日本レントゲン學會雑誌 11:76-82,1933
4. 後藤五郎、日本医学放射線医学史考 昭和編(1927-1945)、第12回国際放射線医学会議、1960
5. 後藤五郎、日本放射線医学発達史(思い出の寸描)、日本医学放射線学会雑誌 23:387-96,1963